

# コラム・横浜郊外文化とトリエンナーレ

■高安宏昌

## 1 現代アートと横浜郊外文化

横浜の郊外は急激な都市化の波にさらされ、市民意識の醸成という課題を残したまま巨大化した。しかし、社会状況、ライフスタイルの変化などもあり、現在は、遊・学・住が一体化したトータルな生活の場としての機能を持ち始めている。

芸術文化の面においても、郊外部は都心部から離れていることで、地域固有の風土や歴史性を反映しやすく、地理的条件ゆえのマジナルな多様性も加えた、新たな芸術文化情報を発信し始めている。

その事例のなかでも特筆すべきが、緑区の横浜国際野外美術展や金沢区の金沢区現代美術展、称名寺芸術祭などのアート・文化イベントの試みである。

この二つの試みに共通する特徴は、市民や区役所が「アート」特に「現代アート」というテーマをそれぞれの地域の風土に溶けこませた上で、まちづくり・ふるさとづくりの素材として活用している点である。

とかく、現代アートは難解で、親しみ難いという声がある。しかし、アートが「鏡」となって今まで気づかなかった日常空間の輝きに気づく場合もある。すなわち一見、アートとは、無縁な毎日を送っていると思っっている我々も、現代アートに接することによって、

日常の空間を全く違った形でとらえることができ、普段は見えていなかった足元の「まち」や「自然」の魅力を発見することができるのではないか。緑区と金沢区の試みがアートのこのような可能性を把握したうえで、それぞれの地域固有の文脈の中で、大人から子どもまで誰もがわかりやすく、参加しやすい形で展開されている点は注目し値する。

## 2 緑区での試み —横浜国際野外美術展

緑区では、有志の区民が近隣区の住民と手を携えて組織している実行委員会（実行委員長・木村勝明氏）が中心となり平成九年に《森と人との新たな関係づくり》をテーマとして「横浜国際野外美術展'97」が開催された。緑区の象徴的な自然景観である里山で国内外の作家の美術作品を展示し、自然とアートが一体となった空間をつくりだすことで、海外も含めた広域の人が出会う場を創出し、開かれた新しい「共同体のイマジネーション」を提出しようという趣旨で行われたものである。このイベントは平成九年以降も「創造と森の声'98アートコンサート」、「アートパーク'99」とその事業は継続され、平成十二年度は十一月十八日より十一月三十日まで「横浜国際野外美術展2000」が横浜動物公園

の森予定地を舞台に開催されている。

そのため、多くの市民、グループ、企業、行政などのサポートを継続した形で得るために「サポート森民プロジェクト」（二〇一、〇〇〇円募金）、「サポートボランティア」制度など様々なサポートシステムを構築している。

また、「アートパーク」（平成十一年実施）や「森の忍者修行ワークショップ」（平成十二年実施）などにみられるように子供と遊びを考えた「冒険遊び場（プレイパーク）」の実験もあわせて行うなど多代的な広がりにも配慮がなされている。すなわち主催者の語る「本来、まちの重要な一部である森（の力）を、アートをキーワードに、私たちの生活にもう一度解け合わせ、森と人との関係を取り戻すきっかけにする」という言葉からも伺えるように単なる一過性のアートのイベントでなく、環境保全や国際交流、人づくりなど様々な要素を併せ持つ総合的かつ持続的なまちづくり・ふるさとづくりのムーブメントとなりつつあるといえよう。

## 3 金沢区での試み —現代美術講座と称名寺芸術祭

金沢区では、平成四年からいち早く現代アートの特徴に着目し、毎年区庁舎において



同展の様子

「横浜国際野外美術展2000」パンフレット



金沢区現代美術展を開催している。これは、「区役所」という従来までなら市民にとって、固くて地味だと思われかねない空間を、人々の華やきの場にしていくというコンセプトで企画されているものである。平成十二年度からは、従来の展覧会に加え、現代アートのおもしろさ、楽しさ、街づくりとの関わりなどを作家やキュレーターと区民が対話しながら考える「金沢区現代美術講座」を新たに開催し、その成果を発展させる形で、平成十三年度には、区民と手を携えて、展示会場を増やすなど街のなかでアートイベントを展開していく企画を検討している。

また、金沢区は市民の自立した形でのアートイベントも盛んな地域である。地元の芸術家や商店主達が繰り広げる伝統芸能と現代アートが融合したアートのフリーマーケット「称名寺芸術祭(注1)」や横浜市立大学の学生と地元の小学生からなる地域まちづくりクラブ・金沢八景クラブが開催した内海の景観を活かした光と闇のイベント「瀬戸の秋月復活祭(注2)」など「海と緑と歴史」の街・金沢ならではのイベントが開催されている。称名寺芸術祭にしろ金沢八景クラブの試みにしろ、都市化の中で失われてしまっていたと思われていたかつての風光明媚な金沢八景の残存に住民自らが、アートという光を当てること、今の時代に新しい形で甦らせようとする試みである。

とする試みである。

#### 4 トリエンナーレまちづくり

横浜の郊外には、開港文化一色に染まらないうれやうれな固有の地域の歴史を持ち、多摩三浦丘陵や幾つもの短い河川、そして東京湾、相模湾がおりなす豊かな「山野河海」の自然空間が広がっている。市民の興味関心がマイホームといった「私空間」のみに注がれているうちは、無機質なベッドタウンに過ぎないが、緑区で言えば「里山」に、金沢区では「海岸線」や「神社・境内」に多くの地域住民がかかわり、維持運営してゆく場所(公共空間)として、再認識された時に、横浜の郊外の街は全く違った姿をみせるであろう。そして、そこから新しい地域文化が生まれ、さらには新しい「ふるさと」が創造される。

現代アートは、そのためのひとつのツールとして大きな役割を果たすことが期待されているのである。

このように郊外区で、現代アートとまちとの関係の再構築が試されているなか、二十一世紀の幕開けに、国際現代美術展である「横浜トリエンナーレ」が平成十三年度より開催される。そして、パシフィコ横浜展示ホールや赤レンガ1号倉庫のメイン会場にとどまらず、市内各地で連携実施を呼びかけ、横浜の

まちの魅力を最大限に生かした「美術の祭典」とし、展覧会期中はレクチャーやワークショップなどの関連イベントを実施し、多数の観客、市民、関係者との広範な対話と交流の場の創出が目指されている。

前述した緑区と金沢区における事業も三年ごとの横浜トリエンナーレの開催と連動し、より関連性を増した事業として相乗効果を生じさせることを意図している。

さらに、この二区に留まらず、アートを切り口にした「まちの魅力づくり・ふるさとづくり」の動きがトリエンナーレと連動して横浜各地で興ることが期待されている。例えばトリエンナーレメイン会場となる中区でも、本会場のイベントとは別に、山手洋館地区において、山手234番館、山手111番館等を中心とした街をアートでプロデュースしようという独自の動きがでてきており、このような都心臨海部と郊外部のそれぞれの地域が個性を生かした事業を展開し、アートが「街」と「人」を、そして「人」と「人」を結びつけていくことよって、この横浜において二十一世紀に向けたたたくさんの「ふるさと空間」が生まれ、ネットワークされてゆくことが期待される。

△市民局文化企画課担当係長▽

#### 平成十三年「金沢区現代美術講座」のパンフレット



注1 鎌倉時代以来の歴史的庭園である称名寺一帯の緑と歴史の空間を地域共有の財産として、現代アートの視点も取り込んでプロデュースしていくというイベント

注2 子供達の手作りの行灯で瀬戸神社琵琶島弁財天をライトアップし、同時に平潟湾周辺のマンションのライトダウンを呼び懸けるイベント

#### 「横浜トリエンナーレ2001」チラシ

